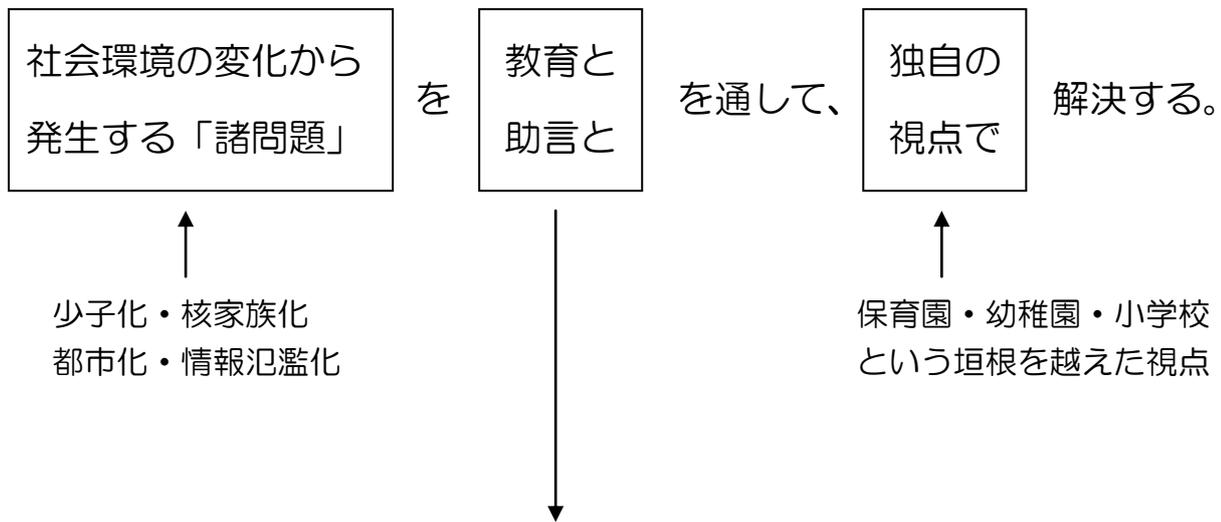


自 平成 23 年 4 月 1 日  
至 平成 24 年 3 月 31 日

## 平成 23 年度 事業報告書



1. 教育事業（教育実践を通して）

- (1) 人と関わる力の育成（幼児とその親）…………… 2
- (2) 考える力の向上（幼児・児童）…………… 3
- (3) 体を動かす力の習得（幼児・児童）…………… 6

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

- (1) 育児・教育に関する相談と助言…………… 8
- (2) 実践研究とその成果の公開…………… 8

3. その他（地域社会への還元）

- (1) 文化的活動の「場」の提供…………… 10
- (2) 震災時に避難する「場」の提供…………… 10

## 1. 教育事業（教育実践を通して）

前記スタンスに基づき、下記のような教室を設置し、社会的諸問題の解決に当たった。

（参加人数は最多在籍時の数値）

### （1）人と関わる力を育成する教育

#### ■はじめての教室（対象：1歳～3歳の幼児とその親）

【内容】 他の親子と継続的に関わりあう「場」を設定し、広々とした環境の中でクラス担任のリードの下、幼児には遊びを通して社会化を促し、親には適宜、アドバイスをしたり勉強会を開催したりしながら子育てに関する不安を解消させる。

【結果】 当年度は2歳児コースを1クラス増設したことにより3学年あわせて171組という過去最高の会員数を記録した。さらにキャンセル待ちをしている幼児を含めると200組以上が当スクールの教育を支持していると言ってよい。昔のように子どもが安全に自由に遊べる空間が身近にない社会事情の中、また、少子化で同年代の子どもが身近にいない社会環境の中、子ども達に安心して集団生活を送る場を、保護者に確かな育児情報を提供することの重要性を改めて確信した1年であった。

参加者 親子 171組

内 訳 1歳児親子 52組（週1回・年35週）

2歳児親子 80組（週2回 or 3回・年35週）

3歳児親子 39組（週3回 or 4回・年35週+2泊3日の合宿）

【課題】 当年度は入会を希望していて叶わなかった100組近い人々を、時間割を調整するなどをして、2歳児コースの親子20組を受け入れた。

しかし、新年度の4月開講に向けてクラスの増設を決定するのが前年の12月中旬になるため、キャンセル待ちをしている多くの人々が待ちきれずに「やむなく塾のようなところ」に行ってしまう。この状態を改善し、11月にはクラス増設が決められるよう、今後は人材の確保を早めに進めていきたい。



3歳児コース「修了式」。まるで幼稚園の年長児のよう

## (2) 考える力を向上させる教育

### ■言語力UP教室（対象：3歳～5歳の幼児）

【内容】将来、論理的思考ができる人間に育てるため、「幼児なりに」筋道を立てて物ごとを考える経験をさせておく。

【結果】前年度（平成22年度）から3歳児コースでは幼稚園などで扱わない領域や観点で考える力を育むため、遊びの中で科学的な現象に触れさせたり、道具の工夫されているところに気づかせたりして、その現象や仕組みを言葉にさせる活動や、社会的な事象を「ごっこ遊び」で終わらせずに、考えるための素材として生かす活動を増やした。

たとえば、「箒・塵取り・ゴミ箱」と「掃除機」とを見比べさせて、掃除機の先端が箒の、掃除機のホースが塵取りの、そして、掃除機の本体内の紙パックがゴミ箱の役割を果たしていることに気づかせ、掃除機の便利さに驚きを感じさせた。

また、「天秤棒遊び」を通して、重い方が下がることを体で感じさせ。体のバランスを取って持つためには、天秤棒の中心より重い方に近づいて持てばよいことに自然に気づかせるなどの活動を通し、子ども達は、「発見する目」を養い、因果関係などを説明する言語力を伸ばした。

参加者 幼児 97人

内 訳 3歳 42人（週1回・年35回）

4歳 32人（週1回・年35回+2日の夏季集中授業）

5歳 14人（週1回・年35回+2日の夏季集中授業）

【課題】幼稚園などで扱わない、または、扱っても「切り口」が違う授業内容にするための工夫が求められており、前年度に開発した3歳児コースについて理科的なカリキュラムの改善を図った。次年度はその仕上げに入りたい。



天秤棒の両端に重さの異なる「水入りペットボトル」を下げ、バランスを取りながら歩く子ども。

## ■発信力UP教室（対象：小学校1年～6年の児童）

【内容】「書く」ことで思考力を高めさせる指導を行った。「書く力」を育てるには、「話す力」同様にその前提として「情報を収集する力」が必要であり、情報を収集するには、「見る力」「聞く力」の育成が不可欠である。特に、資料を分析したり、現象を把握したりして、その内容を文章化するには「観察力」の養成が欠かせない。そこで、小学生でも基本的に身近な現象や部品などを観察させ、そこで起きていることに気づかせるようにした。

【結果】東日本大震災の記憶が冷めやらぬ当年度は、地震や原発事故、エネルギー問題などを多く取り入れた授業を行った。たとえば、「自分が私立小学校の校長だとして、校庭で0.2  $\mu$ シーベルト放射線量が記録された場合、あなたは学校を休校にするかどうか。その判断基準を示し、保護者に出す「お知らせ」の文を書きなさい。」というような課題を与えて作文を書かせた。最初のうちは「お母さんたちにアンケートを取って休校にするかどうか決める。」と言っていた子ども達も、「他人に判断を委ねないで、資料を基に自分なりに判断しなさい。」という指示を受け、徐々に「0.2  $\mu$ シーベルトなら世界の平均と比べてそう高くはないから…」など、与えられた資料を自分なりに分析し、自分の判断を文に表していくようになった。

参加者	小4・5年	8人（月1回・年12回）
	小3	6人（夏季集中6日間）

【課題】当教室の指導者が、言語力UP教室のカリキュラム開発に全面的に関わった（週3回の授業を受け持った）ため、平成23年度の発信力UP教室は、4・5年生クラスのみを開講。しかも、月に1回という授業体制にならざるを得なかった。前年度在籍していた24人、新たに入会を希望していた多くの新1年生の要望に応えられなかったことは残念ではあるが、特殊な授業なのでそう簡単に指導者が見つからないのが現状である。



砂を入れた容器に水をまき、それを電気マッサージ器で振動させて「液化化現象」を起こした。その様子をレポートにまとめたほか、今まで地震保険では3度以上傾かないと保険金が下りなかったが、それで補償は十分かどうかを確かめるため、3度傾いた状態を体験し、その状態がどれくらい不便かを学び、何度から保険金を払うべきかを文にした。（あとで保険規約が変わり1度でも保険金が下りるようになったことも説明した。）

## ■学習力UP教室（対象：小学生）

【内容】じっくりと考える時間を与え、的確なヒントを与えることで「学ぶ」こと、「考える」ことの楽しさを感じ取らせ、子どもが本来もっている学習意欲を復活させる。

【結果】小学校では最近、先生の話をよく聞かずに思いつきで発言したり、塾で予習をしてきて「そんなの簡単」と言い放ったりすることが珍しくないようで、ややもすると、そのような発言に授業が流され、じっくり考える時間がないまま授業が進んでしまうことがある。子どもによっては、もっとじっくりと考えたいと願う子もあり、そのような子のペースに合わせてじっくりと考える時間を取り、指導者との問答を大切にして思考を深めさせた。その結果、「学校の勉強はこんなに深いことを扱っていたのか。」といった趣旨の発言が子どもから聞かれ、「いま習っている内容を深めたい」という意欲を高めることができた。

なお、週に1回の授業のほか、夏休みには6日間の集中授業を行った。

参加者 常設教室 小学生 12人 （週1回・年35回）

夏季教室 小学生 15人 （夏休み6日間集中）



### 【学習教室】

夏休みの集中授業。

2学期に向けてしっかり復習。

苦手科目をなくし、得意科目を増やしていきました。

### 【体育教室】

2歳から通い始めた子ども達も、小学生になるころにはこんなに美しい側転が。



### (3) 体を動かす力を習得させる教育

#### ■体育教室（対象：2歳児～児童）

【内容】 幼児には、歩く・走る・投げる・回るなどの基本的な体の動きが「満遍なく」できるようにし、「体を動かすことの楽しさ」を幼児期に覚えさせる。

児童には、自分の体を操る基本的能力を「いろいろな運動」を通して身につけさせ、運動に対する「苦手意識」を持たせないようにする。

【結果】 幼児には「遊び」の中で歩く・走る・投げる・回るなどの基本的な体の動きを満遍なく取り入れたことで、無理なく運動能力を高めることができた。また、ただ単に「走る」「投げる」「回る」などの動きを体験させたのではなく、将来、体験する「全力疾走」「走り幅跳び」「走り高跳び」「ボールゲーム」「器械体操」などの動きを想定した「遊び」に運動を仕立ててあるため、小学生になったときに「種目」への取り組みも円滑になったことが確認された。また、安全に運動をするためには、きまりを守るなどの社会性を育てる要素も不可欠であり、友だちと関わる力も育てることができた。

児童には「器械体操」系の種目を中心に指導した。それは、この種目が「できる・できない」がはっきりと分かり、「できない」ことが体育への参加意欲の低下につながるだけでなく、学校生活への参加意欲を削ぐ結果になりかねないからである。「体操の選手を育てる特訓ではなく、楽しく自分の力に応じた上達を促すことで、結果的にマット運動などで自信をつけさせる」という指導は難しく、当教室が取り組んでいるこの実践は貴重であると考えている。

幼児のクラスでは指導内容の充実を期して、定員を2歳児が1クラス10名、3歳児が1クラス15名と絞っているため、希望者が全員入会できなかった昨年の反省を踏まえ、当年度は3歳児クラスを1クラス増設したが、それでもまだ希望者全員入会というところまで至らなかった。

参加者 幼児 125人（週1回・年間35回＋夏季集中授業4日）  
小学生 39人（週1回・年間35回＋夏季集中授業6日）

【課題】 幼児クラスの活況ぶりに比べ、近年、小学生クラスの会員減少が問題となっている。原因の一つに指導者の技量の問題がある。どのクラスも2人体制で指導をしているが、そのどちらかでも技量が不足していると難しい年齢の児童の指導がうまく回らない。今後、指導者の技量をいかに向上させるかが課題である。

## ■剣道教室（対象：小学生・中学生）

【内容】日本の伝統的武道である剣道を通し、凛とした子どもに育てたいと思っている保護者は少なくない。しかし、現実には週に何回も稽古に通うような道場か、逆に、学校の体育でほんの少し体験する程度の場合しかない。一人でも多くの子どもに剣道を通じて失われゆく「礼法」を身に付けさせ、「研鑽を積む気力」を育てるためには、この両極端の中間に位置する「場」が必要だとして開設したのが当スクールの剣道教室である。

【結果】人数は少ないながらも堅実に教室の運営をしてきた。入門当初は、正座をしていても手や指を動かしていたり、足をかいたりしていた子どもも、数か月、稽古を積むだけで微動だにしなくなった。

指導は実業団の剣道部の監督をはじめ、部員の方々がボランティアで担当してくださっている。かつて、毎週同じ稽古の繰り返しをしていた時期があったが、現指導者は「なぜ竹刀をこう持たなければならないか。」などと、理由を説明しながらの稽古となり、ただただ稽古をするという文化に慣れていない子ども達には、納得のいく指導となっている。

参加者 小学生 8名 （週1回・年35回）

【課題】剣道を習いたい、町の剣道場や警察の剣道教室のように週に何回も通えないという子どもにも稽古の「場」というのが、当スクールの剣道教室設置の意義である。このような「場」を作ることで、日本伝統の武道に少しでも触れさせたいと考えているが、サッカーや野球、水泳などスポーツの種類が増えていることや、子ども自体があまり体を動かすことを好まないこと、さらには、厳しく叱責される中で力を向上させていくことを避ける傾向があることなどの要因から会員数が伸び悩んでいる。次年度に向けて「体験教室」も開いてみたが、参加者5名中、入会したのは1名という結果であった。どんなに良い稽古・教育をしていても人数が少ないのでは教室が成り立たないので、今後は女子の入会も進めていきたい。（今までは男子にしっかりしてほしかったので、女子をあまり積極的に募集してこなかった。）



## 2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

### （1）育児・教育に関する相談および助言

【内容】 以下のような形で育児や教育に関する相談を受ける。

- ①前記教室に参加する親からの相談を随時受ける。
- ②教室に通えない親の電話相談や来訪相談等にも応じる。

【結果】 教育相談・助言の結果は以下の通りである。

今年度より内部会員からの相談はここに含めないことにした。  
平成24年度より外部からの相談も積極的に受けていくことにしたい。

### （2）実践研究とその成果の公開

#### ①帰国外国人児童生徒教育の支援

【内容】 日本語力が不十分な児童生徒の言語習得、教科学習フォローの仕方について、本財団の「言語力UP教室」「発信力UP教室」「学習力UP教室」での研究成果を生かし、小中学校等の教員の研修をする。

【結果】 平成23年度は以下のような団体に出向き、研修を行った。

国際交流協会	福井県国際交流協会	50人
その他	東京外国語大学REX研修	10人
	独立行政法人 教員研修センター	100人

\*全部で8団体から講演の申し入れがあったが、担当者が病気となりこの3団体に出講した。担当職員の健康が回復したため、平成24年度はすでに5月の時点で8団体からの出講依頼がきているほか、文部科学省の委員として学習指導要領の改定に向けてカリキュラムの開発等を行っている。

#### ②公教育支援のための先行的研究

【内容】 幼稚園や学校では行っていない教育を実験的に行い、研究を積み重ねる。今後その成果を公開することで、公教育の新しい教育領域や教育方法などの発展に資する。



【結果】平成23年度は以下のような研究を行った。

a) 帰国・外国人児童生徒対象の教育に関する研究

「県名カルタ」の開発



覚えにくい県名をどのように覚えさせたらよいかの研究を行い、ダジャレで覚える「県名カルタ」を開発した。絵とダジャレとを照合させる方式のカルタで、繰り返し楽しみながらカルタ取りをする過程で、自然に県名が耳に馴染むよう工夫した。平成24年度よりこれを公開し、希望者（学校）にはPDFデータの形で提供する。

b) 幼児（3歳～5歳）対象の教育に関する研究

「幼児なりの論理的思考力」の育成方法

幼児教育というと情操教育と社会性の涵養に重点が置かれがちだが、論理的な思考力の養成という観点が乏しいように思われる。それは幼稚園では、ともすれば「知育教育」

「早期教育」という名の下に一蹴され、その一方で、受験を想定した形ばかりの知育が塾などで行われることが少なくない。しかし、今日のように高度に情報化された社会において、筋道を立てて物事を考える習慣は、すでに幼児期から可能であり、またやらなければならないと考える。

幼稚園や小学校の単なる受験対策にならずに論理的思考力を身につけさせるにはどうしたらよいか。これは現代社会の喫緊の課題であり、形骸化された知育教育が蔓延する前に幼稚園等で担えるようカリキュラムの開発をしなければならぬ。

平成23年度は、「重さ」という目に見えない力をどう感じ取らせ、「物の重さ」が身の回りでどのような現象として表れるかを、遊びを通して幼児なりに理解させるかの研究を行い、その研究結果を言語力UP教室で検証してみた。まだ公表段階まで至っていないが、あと1・2年で他の幼稚園でも実践できるようなところまで指導法を固めていきたいと思っている。

【課題】来年度より「公益目的支出事業」となる本事業は、教育現場で抱えている問題に対し、実践的研究を行い、その成果を社会に還元する大変重要な事業であり、極めて公益性の高い事業である。今後、本事業の推進をしっかりと図るべく、人材の育成に本腰を入れていく必要がある。

### 3. その他（地域社会への還元）

#### （1）文化的活動の「場」の提供

【内容】近年、地域の人々の文化的活動が活発になってきているにも拘わらず、公民館などの公共の場の確保が難しくなっている。そこで、活動の場を無償または実費で提供することで、文化的活動のサポートを行った。

【結果】会員の同好会への会場提供

ヨーガの会 年 33 回（8 人）

ブリッジの会 年 34 回（9 人）

書の会 年 29 回（6 人）

地域住民等への提供

コートエコー（コーラスグループ） 年 15 回（40 人）

さくらふぁみり（聖書を英文で講読する会） 年 10 回（4 人）

#### （2）震災時に避難する「場」の提供

【内容】耐震化を進め、震災時に地域の人々の避難場所となるようにする。

【結果】平成 21 年度末に 2800 万円をかけて「耐震補強工事」を実施（施工業者清水建設）。新建築基準法で定める強度を確保した。平成 23 年 3 月 11 日の東日本大地震の際は、帰宅できなくなった会員の宿泊場所として建物を提供した。

今後、予想される東京直下型の地震の時は、会員でも相当多くの帰宅困難者が出るほか、歩いて帰宅する一般住民が途中で帰宅を断念し、宿泊する場所を必要とすることも考えられる。そのような事態に対応できるよう毛布や食料などの備蓄量を増やす方向で検討を進めている。